

佐々町迎木場免の遺跡について

佐々町木場免に戦国時代に関係した石碑があるとの話を伺い、調査に向かった。

< 現地報告その1～謎の石塁と2つの祠～ >

2012年12月2日(日)北村製茶へお邪魔した。

北村製茶は佐世保市近郊の北松浦郡佐々町の標高300m **牟田原開拓地**に、昭和29年に入植された北村親二さんが始められた茶園。北村さん宅より上へ少しあがると比較的に新しい石造りの鳥居が見えてきた、額束には**金比羅神社**と書かれてある、柱の裏には右に氏子中、左に平成16年4月建立と書かれてあった。今から8年前に建てられたもののようだ。鳥居をくぐるとすぐに視界が開け平場に出る、すぐに目につくものがある。ほぼ正方形に人工的に並べられた石が地中に埋められ、頭の部分だけが見えているようだ、何かの土台のようにも見える。眺望がきく崖側に位置しており、正面には半坂峠の山並みがありその向こうにきれいな三角の愛宕山と海が見える。展望台を置くには絶好の場所だ、その石の土台の脇に更に下へと通じる小道があり、降りると二つの石の祠があった。正面の大きな祠の側面には**明治二五年厄三月十日**と彫られてあり、扉の中には風で倒れたのか**御幣(ごへい)**と**御神酒徳利**が転がっている。更によく見るとその下敷きになってなにか青緑色の手鏡の形をしたものがある。いわゆる**銅鏡**なのか？取り出すことははばかれるのでそのままにしておいたが、気になるものだ。その祠の右側に寄り添うようにして半分くらい小さな祠がある。**昭和五年九月十日**と彫られてあるようだ。扉が閉まりかけた状態だったのでしっかりと確認できないが、同じように、**御幣**と**御神酒徳利**が入れられているようだ。これらの祠の変った点とといえば、**お花立て**で、古い石のお花立てのようなものがありはするが、ここで使われているのは、全体に錆びてるがおそらく**薬莢(やつきょう)**でしかも花立てに出来るくらい大きさからみて**大砲の薬莢**だと思われる。ほかに金属製の小さな鳥居や何かの土台のような小物が置いてある。しかしここは柵が設けてはあるが、足を踏み外すと下へ真っ逆さまに落ちるけっこうな崖である。

【謎の石の土台】



横から



正面には愛宕山が見える



上から

佐世保
遺跡
レポート



大砲の薬莢

明治25年

昭和5年



御幣

銅鏡？

御神酒徳利

<現地報告その2～相神浦本陣跡石碑～>

平場から少し昇った所に、木々に隠れるように、大きな石塔が建っている。土手を登り近づくと、深々と大きな文字で「永禄五年ノ役相神浦 飯盛城主松浦丹州親本陣跡」と彫ってある。

裏面には

「牟田原の 野に鋤うちて夜もすから 愛する子等に食ぞみたさば」と彫ってある

開拓時の苦勞を歌った詩のようだ。

石はこの周辺に散布しているものと同じ小さな穴の開いた火山岩で、文字を彫る面は多小平らに削ってはいるが、全体的に自然石で他から持ってきたものではなくこの場所で造られた石碑のようだ。高さは1m30cm程で同じ火山岩の巨石の土台の上に明らかにセメントでくっつけられている。

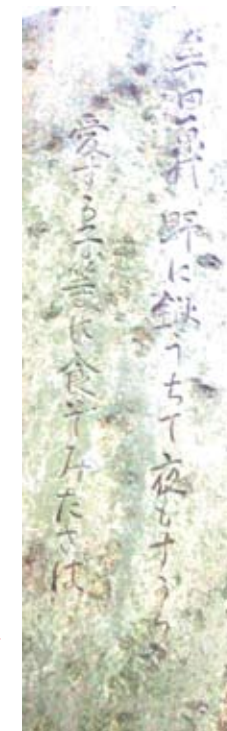
石の風化がさほど進んでいないし、なにより裏面に刻まれた俳句から考えると、明治から昭和初期にかけて行われた牟田原一帯の開拓時に誰かが建てたのではないかと思われる。

北村製茶のご主人は昭和29年にこの地を開拓し茶畑を始められたそうで、その時にはすでにこの石碑はあったであろうが、近年までその存在に気がつかなかったということだった。茶畑の拡大により徐々に山が開拓されたことで発見にいたったということで、誰が建てたのかはご存じないということだった。

オモテ面



ウラ面



「牟田原の 野に鋤うちて夜もすから
愛する子等に食ぞみたさば」
子供たちのために寝る間も惜しんで
牟田原を耕している

【平場からの眺望】

←佐世保市街

愛宕山

半坂峠

佐々



<資料&聞き取り調査>

はたしてこれらの遺構はどのようなものなのか、簡単に3つの疑問点をまとめてみると

1. 土台のような石塁の正体は？
2. 石碑は誰が建てたのか？
3. 本当に宗家松浦の本陣跡なのか？

早速調べたところ、佐世保の図書館では遺構に関する記述は見つからなかった、そこで佐々町立図書館に行き調べたところ、この場所のことが掲載されている本が2冊見つかったので下記に紹介する。

佐々郷土誌



発行者 佐々町教育委員会
発行日 平成 16 年発行

本陣ヶ岳の陣屋(迎木場免本陣)と地図上に場所が明記され、説明書きに「これらの遺跡はいずれも、地元の伝承にもとづいて遺構とされたものであり、これまで遺構調査が行われたことはなく、中世の遺構と断定はできていない。今後の調査が期待される場所である。」としてあり、場所の記述だけで**石碑**の記述はなく、平戸方、相浦方どちらの本陣なのかの記述もなく、詳しいことは書かれていない。

佐々川の流れ



著者 佐々町教育委員会 帆足清勝
発行日 昭和 48 年発行

以下本書から

「永禄の戦などには使用している、出先の本陣と名付けられたのか、相浦方と一戦を交える第一戦の警固陣、**陣屋**があったという。後方に早馬で知らせる。2時間もすれば平戸に知らせることができる。**石垣**が残っている。今その跡に**金比羅**さんを祭っている。」としてあり、**平戸方の陣屋跡地として明記**してある。ここでいう**石垣**というのはおそらく例の石塁のことであろうとおもわれる。

聞くとところによると、この辺りを昔から**本陣岳**といい、北村さん宅一帯の**小字**を**本陣**といい、北村さん宅の目の前にある、ため池も**本陣ため池**と言われているようだ。このことから戦国時代、永禄6年に始まる**相神浦2年の役(永禄の役)**の際に、**平戸松浦方、相神浦(宗家松浦)方**のどちらかの本陣がここにおかれた可能性は大きい。

石碑のことだが、どの資料にもこの石碑の記述がなくおそらくは、明治から昭和初期にかけてこの地へ開拓に来た人々がここが本陣跡であることを知り、開拓の句と共にこの碑を建てたのだろう。見張り台の眼下にある木場集落の方々の中に牟田原を開拓した人達がいたという話もあるのでそのの方々によるものかもしれない。

近日、石の鳥居を建てたと思われる方(おそらくここの地主の方)にお話を伺えるかもしれないので、そこで何かまた分かるかも知れない。

<私的な見解>

石碑には**相神浦方**の本陣跡と書いてある一方で「佐々川の流れ」では**平戸方**の本陣跡としている。どちらだろうか？

私は**平戸方**の本陣だったのではないかと思う、理由は実際に戦闘が行われたのはこの本陣跡地から約3kmほど下った**八の久保**周辺である。ここは見張り場には適しているが、周辺を平戸方に囲まれ籠城戦を強いられたとされる宗家松浦方が陣を取るには**飯盛城**から**八の久保**をはさんで距離がありすぎる。もしかして初期の段階で宗家松浦方側の砦だった可能性もあるが、**深江記**によると、「半坂峠を落とした平戸軍は、別の軍を小川内から大智庵城を回るルートで吉岡町付近にあった小田砦を攻め落とし、高笹峠を越えて三丸館(みつまるやかた)へ至りそこで激戦となった」としている。この、軍が回ったルートに本陣跡地があり、本陣跡地での戦の記録がないことから、元々宗家松浦の砦はなかったといえる。

相神浦二年の役(永禄の役)

この約3年に渡っておこなわれた両者の戦いは**半坂峠**で始まる。平戸方は一度は破れ、押し戻されるが、再度半坂峠を攻め落とし、次いで**八の久保(一本松砦)**を落とし、回り込んできた別動隊が**三丸館(みつまるやかた)**を落とし、いよいよ**飯盛城**を孤立させたのち、本城攻めに入る。

しかし平戸の**隆信**は無理に攻めることはせず、**兵糧攻め**へと持ち込んだともいわれている。

私が思うに、この時期に平戸方は元々本陣を置いていた鳥屋城からは船を出し海路を封鎖したうえで、より飯盛城へ近いこの場所へ本陣を移し、眼下にある八の久保(一本松砦)に先陣隊をしき、海と陸側から飯盛城を完全に包囲したのではないだろうか。

また一つ、相神浦二年の役(永禄の役)の全容が明らかになった気がする。

平戸軍が攻めたルート

